魔法少女リリカルなのは ～時に忘れられし者～

ヴァイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～時に忘れられし者～

【Ｎコード】
Ｎ３９６６Ｉ

【作者名】
ヴァイス

【あらすじ】
死ぬ直前…彼は言った。
護るモノを見つけなさいと…
それが『者』なのか…
それとも『物』なのか…

いまだに答えは見つからない…

Prologue（前書き）

初めての作品なので、悪い点がありましたらどんどん言って下さい。

prologue

――人は寿命があるからこそ、必死に生きる姿が輝いてみえるのだ――

かつての師が自分に向かって言った言葉を思い出す…

ならば…

輪廻の輪から外れ、死という概念を持たない自分は今、輝いていないのだろうか…？

その問いに答えてくれるはずの師は、すでにこの世を去った…

師の最後の言葉は今でも覚えている…

――シオン…君が輝くために必要なのは死ではない…護るモノだ――

息も絶え絶えに、そう言った師は静かに息を引き取った…

護るモノ…

それは『物』なのか？それとも『者』なのか…

それさえ分からぬまま、師の死から五十年が経っていた…

第一話

「暑い…熱い…アツい…」

ひたしらアツイと言う単語を繰り返しながら、シオン＝マクレイオスはクラナガンへ続く道を歩いていた。

本来なら電車、もしくはタクシーを使っても二時間はかかる道のりを、彼は炎天下の中六時間をかけて歩いてきたのだ。

長い銀髪を濡らす汗、その汗の量がその辛さを物語っている。

「オルトロス…マスターが暑いと言ってんだ。なんとかしろよ…」

シオンがそう言うと、左腕に着けているブレスレットの宝石から声が響いた。

ＡＩ（人工知能）を搭載したデバイス『オルトロス』だ。

デバイスとは、この世界では普通に使用される力…魔法を使うための道具の事を指す。

魔法の複雑なプログラムをあらかじめ入力しておく事により、魔法の行使を簡単にするための道具だ。

更にＡＩを搭載したデバイスをインテリジェントデバイスと言い、マスターとの対話も可能となっている。

常にマスターには敬意を持って接するように出来ている

『黙っててください。今いい所なんです』

…はずなのだが

「てめぇ…また勝手にネットワークに繋いでエロゲーダウンロードしやがったな！？」

かれこれ二十年の付き合いになるオルトロスがシオンに敬意を示したことは、ほとんど無かった…

『黙ってと言ったはずです。耳が悪いのですか？それとも頭ですか？後者なら救いようがありませんね…』

むしろ罵られることの方が圧倒的に多かった…

この二十年の間に胃に穴が開かなかったのは奇跡に近いと思う…

そんないつものやり取りをしてる最中の事だった。

「…！？」

突然自分たちの周りの色が変わり、車道を走っていた車が一台残らず姿を消したのだ。

『半径五十メートルの結界の発動を確認しました。とりあえずミーアルートに入った所でセーブしときます』

「まだエロゲーやってたのかよ…まあいい、結界のタイプは？」

『外界との繋がりを完全に遮断したベルカ式の隔離結界ですね』

結界とは指定した物をや生き物を隔離するための魔法で、周りに見られたくない時や、ターゲットを逃がしたくないときに使う魔法だ。

『脱出方法は貫通効果を持つ砲撃魔法で破壊か、術者をたおすかの二択ですが、今マスターが使える魔法に貫通効果を持つ魔法はありません。ならばやることは一つ…』

「術者をぶっ飛ばすか…めんどくせぇな…」

そう言いながらシオンは左腕に着けたブレスレットに触れながら静かに言った。

「オルトロス、セットアップ」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

打って変わってオルトロスの真面目な返事と共に、シオンの体が光に包まれる。

魔力により分解された服は、魔力を帯びた鎧となり、小さな宝石に収納されていたデバイスが本来の姿を取り戻す。

光が収まると、数秒前まで着ていた服は無くなり、黒いロングコートの下に同じ色のジャケットにパンツといった、全身黒尽くしの格好になっていた。

魔導師が着る防御効果を持つ服『バリアジャケット』である。

更に両の手にはリボルバータイプの銃の姿になったオルトロスが握られていた。

銃と言っても実弾が入っている訳ではない。

管理局が管理している全ての世界では質量兵器…つまりは火薬などを使う非殺傷設定ができない武器は、使用が禁止されているのだ。

そして実弾の代わりに使われるのが、魔力によって作り出された弾丸である。

「オルトロス、索敵開始」

「了解」

起動したオルトロスに索敵を命令し、自分でも気配が無いかを探る。

「索敵完了。敵は私達を囲むように六つ、徐々に近づいてきています。」

「六人か…魔力量は？」

「Bランクが一人にCランクが五人。マスターなら余裕ですね」

「言ってくれるねぇ」と返しながらも実際余裕だった。しかしシオン相手にこの人数では明らかに足りないと敵も分かっているはずだ。なのにこれしかこないという事は…

「俺の力を計ろうってか？この程度で本気なんか出すかよ」

そう言って両腕を広げ左右に狙いをつけると、一気に四発の魔力弾を発射した。

『全弾命中、残り四つです』

敵が近付いて来るにつれその姿が明らかになる。

「戦闘機人？…いや、違うな…」

全身に体に張り付くようなボディスーツを着て、その手に持っているのは対人用としか考えられない形をした剣…

更に言うなら全員同じ顔なのだ…

金色の目に金髪。凹凸の少ない体…

かつて時空管理局地上本部の機能を完全に破壊した戦闘機人によく似ていた。

「オルトロス、生体反応は？」

『ありません、完全な機械と見て間違いないでしょう』

「そうか…」

左右の銃からカートリッジを一発づつロードすると、シオンの周りに赤いナイフが十本浮かび上がった。

「ブラッディーダガー…GO！！」

そのかけ声と同時に放たれたナイフは縦横無尽に飛び回り、一番離

れていた敵に四本、近くの三体には二本づつ命中し、爆発を巻き起こした。

『全弾命中、敵反応…全て消滅しました』

「終わったか…」

そう呟いた瞬間結界に亀裂が入り、世界が色を取り戻す。

「今のヤツら…戦闘機人とは少し違うみたいだな…」

『戦闘機人の体は普通の人間の骨格を機械化し、更に脳を機械により強化したものです。少し丈夫な人間と変わりません…しかし…』

「あぁ…ヤツらは完全に機会だった…」

周囲に転がる残骸…

倒したのが戦闘機人なら肉片や血が残るはずだが、転がっているのは機械だけ。

それは、襲撃犯が戦闘機人でないことを物語っていた。

「まぁ、どうせ犯人はアイツだろうな…」

『でしょうね』

諦めの色を含んだため息を吐きながらシオンはバリアジャケットを解除し、オルトロスを待機モードにもどした。

『それでは私は続きをやりますので、話しかけないで下さいね』
待機モードに移行したとたん、そう言ってオルトロスは喋らなくなる。
「……はぁ……」
二度目のため息は先程より大きな諦めが含まれていた。

荷物をまとめ、再び歩きだそうとしたその時だった。
突然背後に展開された転移魔法に振り向くと、ポニーテールの女性がこちらに剣のようなデバイスを向けながら立っていたのだ。
さっきの連中の仲間かと思い、咄嗟にデバイスに手をかけたがすぐに思いとどまる。
さっきの機械とは違う強い意志を宿した瞳…
その目を見ただけで、彼女は敵じゃないと思ったのだ。
「えっと…どちらさん？」
とりあえず当たり障りのない質問を投げかけてみることにした。
「時空管理局本局、機動六課所属シグナム二尉だ。先ほどの結界の

発動及び戦闘行為について事情を聞かせてもらいたい、ご同行願いたいのだが？」

「これって任意同行だよな…」

「そうだ」

「つまりは拒否権がある」

「あぁ」

「ちなみに拒否した場合は？」

「斬る」

「ご同行させて頂きます」

シグナムと名乗った女性とシオンの間には『任意同行』に対する理解の差があるようだった。

こうして俺は機動六課と出会った…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3966i/

魔法少女リリカルなのは ～時に忘れられし者～

2010年11月5日07時08分発行